

去る1月29日に、上北沢界わい宣言推進の会と上北沢桜並木会議から有志のご参加を得て、台湾の南華大学助教授・環境芸術研究所長の陳正哲先生から上北沢桜並木街区の歴史や特徴についてのお話を伺いました。建築や景観、都市計画の専門家のお立場から、大変示唆に富むお話で、国際的、歴史的、学術的に見て上北沢の街区がいかに貴重な文化遺産であるかを教えていただきました。

陳先生は、東京大学で建築史にも詳しい藤森照信教授の下で上北沢桜並木街区を造成した第一土地建物株式会社の親会社である「台湾土地建物株式会社」の研究をされて博士学位を取得された方で、上北沢についても大変御造詣が深い方です。多くのお話や意見交換をいたしましたが、主要な点についてご報告いたします。

1 上北沢桜並木街区の特徴

日台交流史や関東大震災復興の歴史を刻む貴重な街区

上北沢は、台湾土地建物（1908年に創立。）が、関東大震災後に造成した街区である。日本人が台湾に作った建物は多いが、その逆に台湾の企業が日本に投資した事例は極めて珍しい。同社は、後藤新平が台湾総督府にいた時、「読書会の友達とこの会社のアイデアを出した」といわれており、総督府から技術者が出向するなど国策会社に近いものであった。

台湾土地建物が台湾に造成した住宅地には、上北沢と同様に、当時の日本の官吏、学者、軍人などの出身者が多く在住していたという点で共通している。

また、関東大震災後、復興という名目で街づくりの様々な試みが行なわれた、上北沢もその事例として貴重な文化遺産である。

上北沢のように長い時間をかけて創られた街区の美しさは他に代えがたい。どんなに近代的な建設事業が行われても、このような歴史の深みからくる美しさにはかなわない。

文化遺産としての道路計画

上北沢街路の格子状ではない通称「肋骨通り」の形状は非常に珍しく、文化遺産として貴重である。20世紀のまちづくりは格子状の道路計画が中心であった。ヨーロッパでは放射線状の道路がある。しかし、それらとは異なり、非常に珍しい形状であり、考え方である。自分は他で同様の道路計画を見たことはない。

第一土地建物の社長の木村泰治は、与えられた土地の形状を見て道路計画をどうしようか腐心していたところ、友人の医者から生物学的視点、すなわち「魚の骨」のイメージからこの街区を考え付いたといわれる。土地としては使いにくく無駄になる部分があっても、道路の交差点の円形の景観の美しさは格別である。

肋骨通りのもう一つの特徴は、中心の桜並木の方角が南北方向よりも西側に傾いていることである。通常は、南北に家を建てられるよう、格子状に道をつくる。ところが、上北

沢では、中心線が西に傾斜していることと、斜線の道路によって、単純に南北に直角に配置するよりも、各住宅への日あたりがよくなることを考慮した可能性がある。

日本人が台湾で建築した建物は、健康を配慮し、風向きや日照を踏まえて道路の方角を決めたが、ここでは主として日照を考慮していた可能性がある。

2 貴重な街区の維持に向けて

以上のように上北沢桜並木街区は、貴重な文化遺産なので、地元の人にはこれを生活遺産として受け継ぐだけでなく、努力して異なる意見を調整し、次の世代にきちんと受け渡していくべきと思う。その場合、次のようなことを踏まえたらいと思う。

緑の橋 (Green Bridge) としての桜並木

現在の都市計画の考え方では、緑は「面」として広がった方がよいとの考え方が主流である。上空写真で眺めると、上北沢のみならず周辺の松沢病院や北澤用水などにも緑が豊富である。今後さらに周辺に面的に緑を増やし、一帯を「生態都市」(エコタウン)として位置づければよい。その場合、上北沢は、周辺の緑をつなぐ中心に位置し、現在の桜並木はこれらの緑をつなげる「緑の橋」(Green Bridge)と呼ぶにふさわしい存在となる。

上北沢桜並木街区の保存

この地域には道路計画や鉄道高架計画があると聞いている。それが上北沢桜並木街区という貴重な文化遺産を破壊すれば、取り返しのつかないことになる。道路などが必要性であれば、この狭い地域だけに着目するのではなく、道路計画専門の技術者に広域を見た上で、上北沢の街区を通過しないような代替案を立案してもらうことが不可欠である。

物語の伝承

日本には自然を大事にする文化があるので、「木を守る」ことは共感を得やすい。また、高齢者が昔の物語や古い写真を持ち寄ったり、売り出し当時などの復元模型を創ったりして、物語を作り、それを教育によって伝えたらどうか。さらに、その「物語」が特徴的な道路や住宅の方角によって生み出された生活や間取り、道路の景観にも具現化していることが裏付けられれば面白い。

上北沢の歴史について地元の参加者から貴重な情報が寄せられ、またそれぞれの会が活発な活動をしていることについて、陳先生は、「地元の皆さんから紹介された研究はそれだけで論文になりうるようなものである。」と、驚いておられました。先生のように上北沢に愛着の深いご専門家の方に広い視野から上北沢の街の維持、発展にご尽力いただければ大変ありがたいと思いました。

以上